

これは、結氷日の前日に、西高東低の気圧配置になる前の低気圧が通過するために風が強くなり、当日は高気圧に覆われ、雲の少ない放射冷却の大きな日に結氷するということを表している。

また、最近（20世紀後半）の方が、昔（20世紀前半）よりも更に気温が低下しないと結氷・御神渡りがおこらないという傾向が見られた。これは、結氷については、諏訪測候所によって、明確な結氷日の定義が決められ、その基準が厳しくなったことが挙げられる。また、最近の湖の変化（湖盆の形態の変化・温泉の湧出量の増加・湖岸の変化など）によって、氷がはりにくくなってきたことも考えられる。この、湖岸の形態の変化というのは、昔はアシがあった岸辺が、今ではコンクリートで固められてしまったということであり、これ

によって波の抑制や氷の固定作用がなくなってしまった。そしてこれは御神渡りにも影響を与えており、岸に氷が固定できなくなってしまったことにより、氷の力が岸の外に逃げてしまい、氷の膨張時には氷は岸にせり上がって御神渡りとしては現われにくくなってしまった。これが、御神渡りの形成時の最近の気温低下を引き起こしている原因と思われる。

また、諏訪湖の結氷・御神渡りの記録は藤原・荒川によって1つの連続的なデータとしてまとめられたが、このうち1892～1923年の御神渡り日は拝観日の間違いであることが分かった。1924～1944年の御神渡り日と気象データとの関係から、1898～1923年の御神渡り日の推定を行った。

現代作家の描いた世界： 村上春樹と彼の作品を事例として

伊藤直美

村上春樹の一連の8作品を分析し、そこで描かれる「場所」について検討した。個々の「場所」を検討した結果、「場所」を含む「世界」について次の結論を得た。

初期二作品とそれ以降の作品とでは明らかにその作品世界のスケール及び対比される世界が異なるように感じられる。

しかし、初期二作品では、主人公は自分が育った場所を、すでに過ぎ去った過去の場所だと認識

している。そして、『ノルウェイの森』や『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』において、その時間の経過の認識こそが、村上春樹の作品の中では死に結びついている。

例えば、「死んでしまった人は生き残った人の記憶の中にしか生きない。しかしその記憶は時間の中でどんどん抹殺されていく。」のである。

村上春樹はこの8作品でさまざまな角度から生と死を描き続けていると考えられる。

江戸時代末期の横須賀における天候の変動と農作業

越智由美江

測器による観測データが得られない歴史時代の気候の復元には、各種の日記や災害誌の記録が用いられる。現在、歴史時代の気候を復元する研究は、複数地点の記録をもとに天候の空間的分布を把握し天候の推移や季節変化を論じるものが主となっており、天候の推移と人間の活動との関わりについて論じられているものは見当たらない。

そこで本研究では、現在の神奈川県横須賀市太

田和の記録である『相州三浦郡大田和村 浅業家文書 浜浅業日記』を利用し、天候の推移と農作業との関わりを考察する。まず、日々の天候を抜き出し天候ダイアグラムを作成した。この天候ダイアグラムから降水日数・降雪率の算出、“梅雨”期間の推定を行ない、天候の変化をみた。降水日数は現代の横浜の値とほぼ同じであったが、降雪時期は当時の方が長いという傾向があった。